



ISSN 2185-5196

Annual report in fiscal year 2015

Archaeological Research office on the Campus,
Tohoku University

東北大学埋蔵文化財調査室 年次報告2015



仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第14地点空撮（西から）

東北大学埋蔵文化財調査室
年次報告2015

東北大学埋蔵文化財調査室 年次報告2015

目 次

I. 卷頭言	1
II. 東北大学埋蔵文化財調査室の概要	2
1. 東北大学構内の遺跡と埋蔵文化財調査	2
2. 埋蔵文化財調査室の組織と施設	5
3. 運営委員会・調査部会	6
III. 2015年度（平成27年度）事業の概要	7
1. 埋蔵文化財調査の概要	7
(1) 川内北地区の調査	8
(2) 川内南地区の調査	12
(3) 青葉山北地区の調査	14
2. 遺物整理作業	18
3. 年次報告・調査報告の刊行	19
4. 保存処理事業	19
5. 資料保管状況	19
6. 研究活動	21
(1) 受託研究・共同研究・研究協力等	21
(2) 学会発表等	24
(3) 科学研究費採択状況	24
7. 教育普及活動	24
(1) 非常勤講師	24
(2) 授業など教育活動への協力	24
(3) 保管資料の貸出	24
(4) 外部からの派遣依頼等	24
(5) 広報活動	25
8. 東日本大震災による被災文化財の救援活動	26
《引用・参考文献》	
IV. 資料	28
1. 国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程	28
2. 東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会委員名簿（2015年度）	30
3. 東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会調査部会委員名簿（2015年度）	30
4. 東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧	31

I. 卷頭言

『東北大埋蔵文化財調査室年次報告』2015を刊行いたします。

東北大埋蔵文化財調査室は、施設整備などに先立つ、構内遺跡の記録保存のための調査と、それに関連する業務を担当する、東北大の特定事業組織です。埋蔵文化財調査室では、『東北大埋蔵文化財調査室調査報告』と『東北大埋蔵文化財調査室年次報告』という、二種類の報告書を刊行しています。

施設整備などに伴う記録保存のための本調査については、その発掘調査報告書を、『東北大埋蔵文化財調査室調査報告』というシリーズ名で、調査ごとに刊行しています。『東北大埋蔵文化財調査室年次報告』は、埋蔵文化財調査室の事業概要を迅速に報告するという目的のために、年度ごとに報告しています。

本年次報告では、埋蔵文化財調査室が2015年度に実施した埋蔵文化財調査の概要、および調査室が実施したその他の事業について概要をとりまとめて報告いたします。川内北地区では、前年度より引き続き地下鉄東西線川内駅前整備事業に伴う本調査がありました。また、青葉山地区でも、地下鉄東西線青葉山駅前整備事業に伴う本調査を実施しています。

2011年3月の東日本大震災以降、震災復旧事業あるいは震災復興に関わる事業に伴う調査が続いてきました。そして、2015年度は震災のため遅れていた地下鉄事業関連の発掘調査を実施しておりました。そのため埋蔵文化財調査室は、その後の整理作業を含め、これまでに無い膨大な業務量をこなす必要にせまられております。幸い、学内外の関係機関や関係者の多くなご協力を得て、滞りなく事業を進めることができます。ここに厚くお礼申し上げるとともに、今後もご支援とご協力をお願いいたします。

埋蔵文化財調査室長 藤澤 敦

II. 東北大学埋蔵文化財調査室の概要

1. 東北大学構内の遺跡と埋蔵文化財調査

東北大学には、各キャンパスに加え多くの研究施設があり、これらの構内には多くの埋蔵文化財が存在する（表1、図1）。とくに川内地区は、ほぼ全城が仙台城跡の二の丸地区と武家屋敷地区にあたっている（図2）。

現在の日本では、これらの遺跡（埋蔵文化財包蔵地）において掘削を伴う工事を行う場合、文化財保護法により届出が義務づけられている。工事の掘削で遺跡が壊される場合には、計画の中止や変更により遺跡を現状で保存することが、文化財保護の観点では最善である。しかし現実には、現状保存は難しい場合が多い。そのため、発掘調査を行い記録を作成することで、次善の策とする記録保存という方法が取られている。記録保存のための発掘調査は、経費を原因者が負担した上で、地方公共団体が実施するのが基本である。

構内に遺跡が存在する大学では、施設整備事業などの工事に先立つ記録保存のための調査を実施する組織として、大学内部に埋蔵文化財調査を担当する組織を設けることが進められてきた。考古学や関連する学問分野の専門研究者が大学内部に所属している場合には、学術的に充分な検討がなされるという社会的信頼に基づき、大学独自の埋蔵文化財調査組織が設けられ運営されている。学内に調査組織を設けていると、結果的に迅速な調査と施設整備事業の円滑な推進が図られるという側面もある。

東北大学においても、同様の理由から、1983年度に東北大学埋蔵文化財調査委員会が設置された。これ以降、東北大学構内の施設整備等に伴う埋蔵文化財調査については、調査委員会の実務機関である埋蔵文化財調査室が実施してきた。1994年度には、調査委員会を改組し、学内共同利用施設としての埋蔵文化財調査研究センターが設置された。2006年度には、特定事業組織としての埋蔵文化財調査室へ改組され、事業を引き継いでいる。

表1 東北大学構内の遺跡

所在地名	所在地住所	道 跡 名	県道跡番号	時 代	備 考
川内1	仙台市青葉区 川内27-1-41他	仙台城跡	01033	近世	二の丸地区・二の丸北方武家屋敷地区・御真林地区
	仙台市青葉区 川内12-2	川内古碑群	01386	鎌倉	弘安10年（1287）・正安4年（1302）他
	仙台市青葉区 川内41	川内B道路	01565	繩文・近世	
青葉山2	仙台市青葉区 荒巻字青葉6-3	青葉山B遺跡	01373	繩文・弥生 古代	
	仙台市青葉区 荒巻字青葉6-3	青葉山E遺跡	01443	繩文・弥生 古代	
青葉山3	仙台市青葉区 荒巻字青葉468-1	青葉山C遺跡	01442	旧石器	
富沢	仙台市太白区 三神峯一丁目101	芦ノ口遺跡	01315	繩文・弥生 古墳・古代	
川渡	大崎市鳴子温泉 大口字蓬田	上川原遺跡	36006	繩文	
	大崎市鳴子温泉 大口字町	丸森遺跡	36038	繩文	
	大崎市鳴子温泉 大口字町	東北大農場2・3号畑遺跡	36098	繩文	
	大崎市鳴子温泉 大口字町西	町西遺跡	36106	弥生	
小浜浜	牡鹿郡女川町 小浜浜	小浜浜B遺跡	73021	繩文	宿舎裏の山林部分



- 1 : Ruin of Sendai Castle
- 2 : Kawauchi steles
- 3 : Kawauchi A Site
- 4 : Kawauchi B Site
- 5 : Sakuragaoaka kouen Site
- 6 : Aoayama B Site
- 7 : Aoayama E Site
- 8 : Aoayama C Site
- 9 : Aoayama A Site
- 10 : Aoayama D Site
- 11 : Ashinokuchi Site



- 1 : 仙台城跡
- 2 : 川内古碑群
- 3 : 川内A遺跡
- 4 : 川内B道路
- 5 : 桜ヶ岡公園遺跡
- 6 : 青葉山B道路
- 7 : 青葉山E遺跡
- 8 : 青葉山C道路
- 9 : 青葉山A遺跡
- 10 : 青葉山D遺跡
- 11 : 壱ノ口遺跡
- 12 : 片平仙台大神宮の板碑
- 13 : 郡六日如来の碑
- 14 : 葛岡城跡
- 15 : 郡六城跡
- 16 : 郡六建武碑
- 17 : 沿田道路
- 18 : 郡六御殿跡
- 19 : 郡六道路
- 20 : 松ヶ丘道路
- 21 : 向山高裏道路
- 22 : 秋ヶ丘道路
- 23 : 茂ヶ崎城跡
- 24 : ニワ沢横穴墓群
- 25 : 秋ヶ岡B道路
- 26 : 八木山綠地道路
- 27 : ニワ沢道路
- 28 : 青山二丁目道路
- 29 : 青山二丁目B道路
- 30 : 穂土手（鹿除土手）
- 31 : 砂押原敷道路
- 32 : 砂押古墳
- 33 : 富沢道路
- 34 : 泉崎浦道路
- 35 : 金洗沢古墳
- 36 : 手内窑跡
- 37 : 手内道路
- 38 : 手内横穴墓群
- 39 : 三神峯道路
- 40 : 金山窯跡
- 41 : 三神峯古墳群
- 42 : 富沢窯跡
- 43 : 喜町東道路
- 44 : 裏町古墳
- 45 : 原東道路
- 46 : 原道路
- 47 : 八幡道路
- 48 : 後田道路
- 49 : 町道路
- 50 : 神流山道路
- 51 : 御堂平道路
- 52 : 上野山道路
- 53 : 北前道路
- 54 : 佐保山東道路
- 55 : 川内C道路
- 56 : 経ヶ峰伊達家墓所

図1 東北大学と周辺の遺跡

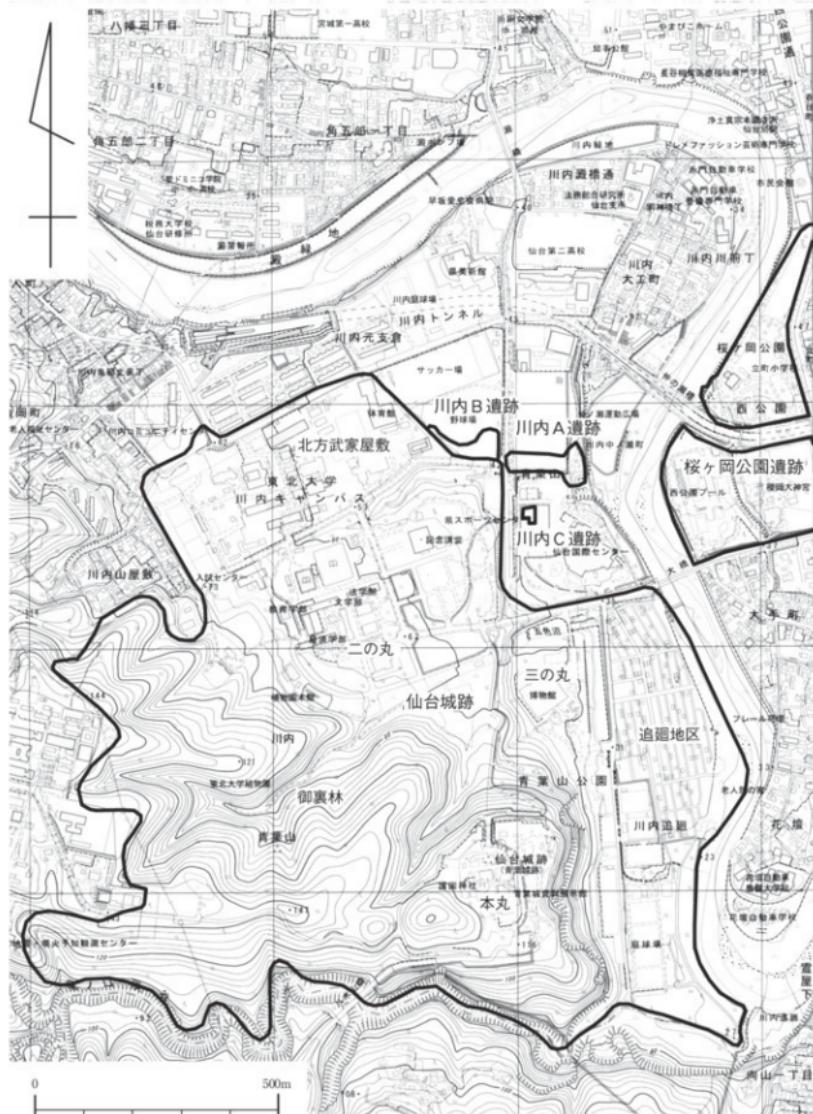


図2 仙台城と二の丸の位置

2. 埋蔵文化財調査室の組織と施設

埋蔵文化財調査室の職員は、併任の調査室長1名、文化財調査員3名（うち特任准教授1名、専門職員2名）、事務補佐員1名（時間雇用職員）、および整理作業を担当する作業員4名（時間雇用職員）からなっている。これ以外に、発掘調査を実施している期間は、発掘調査に従事する作業員（時間雇用職員）を雇用している。

2015年度には室員の変更があった。まず、藤澤敦特任准教授が2015年度から本学総合学術博物館教授として異動した。それに伴い専門職員の菅野智則が特任准教授に昇任した。また、専門職員として石橋宏があらたに着任した。これらの人事については、前年度の2月13日に開催された運営委員会にて承認を受けたものである。

埋蔵文化財調査室を運営するにあたって必要な経費は、埋蔵文化財調査室運営費として措置されている。内訳は、事務補佐員1人の人件費と、光熱水料、自動車維持費、消耗品費などである。

発掘調査については、事業費の中に組み込まれる形で、事業ごとに予算化されている。

調査終了後の整理作業と報告書印刷刊行費については、全学的基盤経費によって措置されている。整理作業に携わる作業員4名の賃金も、ここから支弁されている。

埋蔵文化財調査室の主要な業務は、調査委員会の設置以降、片平地区の生命科学研究科3階の一画を使用して行なってきたが、生命科学研究科建物の整備工事に伴い、仮施設での業務を経て、2011年2月に施設部などが入っている本部棟4の1階に移転した。本部棟4に移転した後の部屋面積は191.5m²で、これに廊下を仕切って収蔵庫としている部分20.5m²が加わる。室長室兼事務室、調査員室、作業室、予備室、収蔵庫からなっている。本部棟4内にある収蔵庫は、出土遺物の中でも、報告書に図示され、借用や調査依頼の多い資料については保管している。それ以外の遺物については、保存処理作業棟南側に置かれている収蔵庫において保管している。作業室は、実測などの作業をはじめとする整理作業を行う部屋で、報告書などの文献を保管している書架も置いている。予備室は、当面は写真撮影や小規模な打ち合わせなどをを行う補助的なスペースとし、将来的には構内遺跡の発掘調査成果を紹介するコーナーへと整備していく予定。

保存処理の作業は、2001年度に生命科学研究科の南側に設置された作業棟（プレハブ平屋建・79m²）を利用している。また、ガレージの一部の34m²を使用しており、調査室用の公用自動車を保管している他、保存処理用の大型水槽を設置している。発掘調査用機材も、ここで保管している。2003年度には、出土遺物の収蔵庫として保管倉庫（プレハブ2階建・202m²）が作業棟の南側に設置され、専用の保管場所が確保された。ただし、東日本大震災以降における発掘調査の急増のため、これらの遺物の保管場所は手狭になることが予想される。今後、何らかの対策を講じていきたい。

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、東北大学にも多大な被害をもたらし、埋蔵文化財調査室でも被害が生じたが、全般に被害程度は軽微で、早期に復旧することができた。家具類の転倒防止措置や、棚への転落防止ベルト（タナガード）の設置が、被害の軽減に極めて効果的であった。ただし川内南地区にあった発掘調査用の資材倉庫（プレハブ平屋建・58m²）は、老朽化していたこともあり、2012年度に取り壊して撤去した。

表2 2015年度埋蔵文化財調査室職員

職名	氏名等	備考
調査室長	文学研究科教授 阿子島 香	併任
文化財調査員	特任准教授 菅野 智則	
	専門職員 荣田 忠子	
事務補佐員	専門職員 石橋 宏	
整理作業員	時間雇用職員 久我 泰ヶ江	埋蔵文化財調査室運営費を財源とした職員
整理作業員	時間雇用職員 4名（通年4名）	全学的基盤経費を財源とした職員

3. 運営委員会・調査部会

東北大埋蔵文化財調査室では、埋蔵文化財調査室規程第6条に基づき運営に関する重要事項を審議する運営委員会と、同規定第9条に基づいて運営委員会の下に埋蔵文化財調査に関する専門的事項を審議する調査部会が設置されている。当調査室は、これらの委員会・部会の審議をもとに運営が進められている。通常は、運営委員会は年度当初に一回開催し、年間の事業予定・予算等などの基本的事項を審議している。調査に関わる具体的かつ専門的な事項は、必要に応じて調査部会を開催して審議することとしている。

2015年度は、6月4日に運営委員会を1回実施した。調査部会は、開催していない。運営委員会の開催月日と議事内容は、以下の通りである。

埋蔵文化財調査室運営委員会（2015年6月4日、於：施設部会議室）

審議事項

- (1) 平成26年度埋蔵文化財調査結果および平成27年度の埋蔵文化財調査計画について
- (2) 平成26年度調査室運営費決算および平成27年度調査室運営費予算について
- (3) 平成26年度の整理作業結果および平成27年度の整理作業計画について
- (4) その他

報告事項

- (1) 川内萩ホール展示スペース常設展示について
- (2) 埋蔵文化財調査室ホームページの更新について
- (3) その他

III. 2015年度（平成27年度）事業の概要

1. 埋蔵文化財調査の概要

2015年度は、記録保存のための本調査2件、立会調査11件を実施した（表3）。本調査2件は、川内北地区と青葉山地区でそれぞれ実施している。立会調査に関しては、2009年度途中から、仙台市教育委員会の指示に従い、工事日程を事前に仙台市教育委員会に提出した上で、当調査室が立会調査を行っている。なお、立会調査のうちの2件は、前年度に終了した仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第15地点（BK15・課外活動施設新館に伴う調査）の外構工事（課外活動施設外構工事）と、本年度に終了した仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第14地点（BK14・川内駅前広場整備工事）の周辺工事（屋外環境整備（川内駅前広場等）工事）に伴うものである。

川内北地区では、川内駅前広場整備事業に伴う発掘調査（BK14）を、2015年3月1日から7月6日まで実施した。この地点の調査は、東日本大震災後の2011年9月より開始していたが、その後の復旧・復興に関わる調査のため、中断を挟みながら継続していた。この地点に関わる発掘調査に至る経緯については、「年次報告」2011年に示してある。

青葉山地区では、地下鉄東西線青葉山駅と関連する屋外環境整備（駅前広場）に伴う青葉山E遺跡の第10次発掘調査を実施した。この調査は、前年度に試掘調査を行い、工事予定地のほぼ全域で遺物包含層が残存していることが確認できたため、全域の発掘調査を実施したものである（「年次報告」2014）。本調査は、7月1日から10月30日までの4ヶ月間実施した。

表3 2015年度調査概要表

調査の種類	地区	調査地点（略号）	原因	調査期間	面積（m ² ）	時期
本調査	川内北	マルチメディア教育棟西側（BK14）	（川内1）川内駅前広場整備工事	2015.3.1～7.6 (前年度より継続)	445.5	近世
	青葉山	青葉山体育馆東側（AOE10）	（青葉山2）屋外環境整備（駅前広場）	2015.7.1～10.30	856.9	織文
立会調査	川内北	BK14周辺（2015-14）	（川内1）屋外環境整備（駅前広場等）工事	7/22-7/23-7/28-7/31- 8/3-8/6-8/7-8/18-8/21- 9/14-9/16-9/17-9/30- 10/6-10/14-10/29- 11/11-11/13	-	-
	川内北	BK15周辺（2015-13）	（川内1）課外活動施設外構工事	2016/1/12-13-14-1/21- 1/22-1/23-2/10-2/15- 2/18-2/22	-	-
	川内南	附属図書館前（2015-1）	（川内1）川内南団地案内看板設置工事	5/8	-	-
	川内北	電柱交換室南西（2015-2）	（川内1）電柱工事	7/8	-	-
	川内北	川内17やき保育園内（2015-3）	（川内1）川内17やき保育園園庭排水工事	7/19	-	-
	川内北	川内飯塚校舎B棟（2015-4）	（川内1）飯塚校舎B棟流し取付け工事	7/21	-	-
	川内南	植物園記念館（2015-5）	（川内1）植物園記念館外灯改修工事	8/4	-	-
	青葉山	理学部憩いの広場（2015-6）	（青葉山2）理学部憩いの広場実験機器設置工事	6/3-6/17	-	-
	青葉山	厚生会館（2015-7）	（青葉山2）環境整備（理学部舗装工事）	9/11	-	-
	川内南	植物園記念館前（2015-10）	（川内1）植物園周辺環境整備（舗装）工事	2016/2/29	-	-
	川内北	グラウンド・野球場等（2015-11）	（川内1）屋外環境整備（グラウンド・野球場等）工事	2016/3/25 来年度継続	-	-

(1) 川内北地区の調査

川内北地区では本調査1件、立会調査6件を実施している（図3）。

- a. 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第14地点（BK14・2015-14、川内駅前広場整備工事・屋外環境整備（川内駅前広場等）工事）

・調査の経過

2015年度は、これまでの残りの5～7区を同時に調査することとした（図4～6）。調査した合計面積は445.5m²である。前年度末3月初めの重機掘削の際に、7区南側と東側に大規模な擾乱が認められたことから、その部分については調査しないこととした。3月中旬には擾乱掘り上げ等を行い、4月から精査を行った。当初は、西側を主体的に精査していたが、東側で池跡と考えられる大規模な遺構が確認できたことから、調査期間の見通しをつけるために、東側の精査に移った。擾乱により確認できた断面からは、この池跡の埋土には有機物が多数認められたため、池跡埋土に関しては水洗篩による遺物の回収を目指した。5月には池跡を含め7区と6区東側については精査が完了した。残り5区と6区西側については、6月中旬に精査を行った。6月後半に擁壁建築のための掘削箇所が当初の計画から外れていることが判明し、新たに拡張区を設定し7月6日までに終了した。2011年度以来継続してきた仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第14地点の総調査面積は、954m²となった。

また、周辺の環境整備に伴う工事（2015-14）については立会調査を実施した。その掘削地点の大部分は、近代以降の盛土の範囲内に収まり、近世の遺構等は確認されなかった。しかし、川内北合同研究棟北東側に位置する電気ハンドホール部1箇所では、時期不明の遺構1基が確認できたことから、緊急に9月16・17日に調査を実施した。これらの成果を含めて、今後報告書を刊行する予定である。

・基本層序

基本層序は、南西側に隣接する仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（「調査年報」19）と、おおむね共通する。

1層　陸軍第二師団期以降、現在に至る時期の整地層・表土層である。掘削は重機で行っている。

2層　基本的には灰黄褐色から黃褐色を基調とするシルト質土で、本調査区における主要な遺構検出面である。

調査時には、その特徴から大きく2a層～2d層に細分したが、検討の結果、2c層と2d層は3a層の変色したものと捉えることができた。

2a層　場所によっては炭化物や小石が混ざり、脱色して灰色となるような土質である。そのため、地点によつては細かに特徴が異なることから、場所によってはさらに細分している。

2b層　灰黄褐色のシルト質土であり、夾雜物などが非常に少ない均質な土質である。おおむね第7地点の2層下部に相当するものと捉えた。

2c層・2d層　当初は、3a層に層の特徴が類似するものの、部分的に灰褐色等を呈していたため、2層に含めて捉えていた。しかし、調査が進むに連れて、3a層が変色したものと捉えられることが判明し、3a層と同時期のものとして捉え直した。

3層　3a層と3b層に細分した。基本的に茶褐色を呈し、黄色のバミスを多く含み、非常に硬い。3b層は、粘土で構成される4層への漸移層として捉えた。遺物・遺構は確認できなかった。今回は、確認のため部分的に3a層を掘り下げたが、大体の場所では3a層上面で調査を終了した。

4層　粘土層であり、地山層として捉えた。これより下位は、粘土と砂の互層によるもので、水性堆積層と考えられる。

調査区西端では、1層直下から3a層あるいは地山層が確認され、2層は存在していなかった。遺構は、井戸などの深く掘り込まれた遺構のみが検出されたのみである。調査区中央部から東側は、2層が堆積している状況が確認され、遺構等も多く確認することができた。



図3 川内北地区調査地点



図4 BK14調査区（上が北）

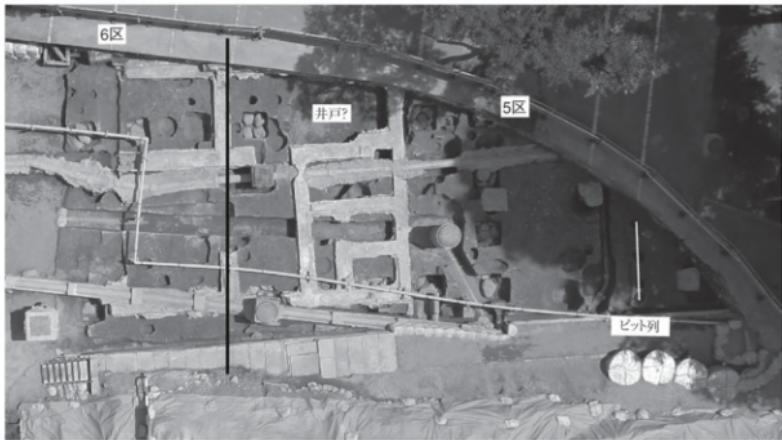


図5 5区・6区西部調査終了状況（下が北）



図6 6区東部・7区調査終了状況（下が北）

・調査成果

今年度検出された遺構には、柱穴と考えられるピット、溝跡、池跡のほか、井戸跡と推定される深い遺構（図5）などを確認することができた。ピットには、底部に柱を置くものや、等間隔で並ぶなど、明瞭に柱列として確認できるものもあり、堀や建物の柱跡として捉えることができる。溝跡は、機能が不明な浅い溝のほか、調査区と東端部では、深く掘り下げられた溝が確認できた（図6）。第7地点でも確認されており、区画の溝とも考えられる。

池跡は、東半部の7区において東西の2箇所確認した。西側の池跡は、最も古い段階では南北2基が連結する池であったが、それらが自然に埋没した後に、新たな池跡を再度掘り直したものである。その肩部には、部分的に石を並べていることが確認できた。第7地点でも同様の池跡が確認されており、それに接続するものと考えられる。東側の池跡は小型の掘り込みを複数連結したもので、最終的には全体的に埋没している。

東側の池跡の埋土からは、有機物が多く確認された。1層は、比較的新しい遺物を含む層である（図7）。2層は、有機物を多量に含む層で、下駄等の木製品も確認されている。3層は水性堆積の泥土に近い堆積層である。4層は壁際に堆積した粘土質の層である。5層は底面に堆積した黄色の地山土を含む粘土層である。これらの池跡の埋土については、2層以下の土壤を全て回収し、水洗篩にて遺物の回収を行った。その結果、微細な陶器などのか、骨や種実類等が回収されている。

これらの遺構群は、1～6区の調査区西半分までは、ピット・井戸等が非常に多い。それに対し、7区東側では、東西の柱穴列、溝跡のほか、池跡で構成されていた。その境部は、米軍の共同溝により破壊されているため不明であるが、明確に遺構の種類の分布の偏りが認められる。このことから、場の使われ方の違いが明瞭であるといえる。今後、遺物の検討も合わせてその具体的な様相について解明していきたいと考えている。

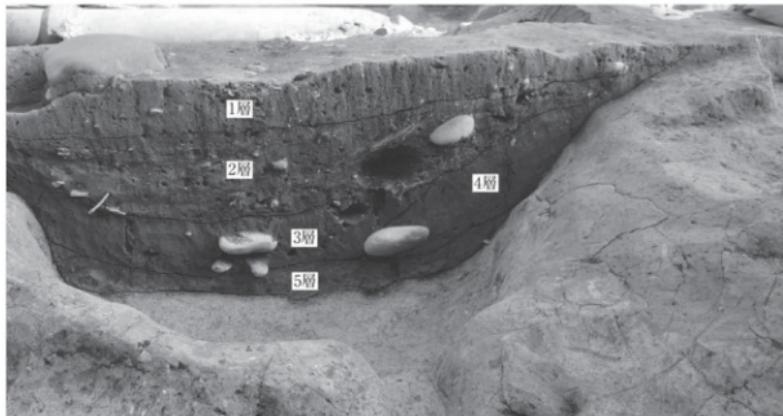


図7 東側池跡東西断面図西半（左側が東）

b. 立会調査

・電柱工事（2015-2）

川内キャンパス西端の電話交換室西側の道路を挟んで反対側に位置する地点である。電柱設置のため2箇所の掘削を行っている。遺構・遺物等は確認されず、地山上が確認されたのみであり問題はなかった。

・川内けやき保育園園庭排水工事（2015-3）

学内保育施設「川内けやき保育園」園庭の水はけが悪いため、排水管等を新規に設置する工事である。掘削深度はごく浅く、掘削部はすべて表土の範囲内に収まっており問題はなかった。

・仮設校舎B棟流し取付け工事（2015-4）

仮設校舎B棟に実験用の流し台を設置し、その排水管を污水樹に接続するための工事である。工事範囲内はすべて建物建築時に掘削されている範囲内に収まり、問題はなかった。

・屋外環境整備（グラウンド・野球場等）工事（2015-11）

川内北地区東端にあるグラウンド・野球場の水はけを良くするための排水管・枠などの設置、バックネットなどの設置を含めた環境整備事業に伴うものである。東北大からの届出に対し、仙台市教育委員会から1m以上の掘削が行われる地点についての立会指示を受けた。そのため、当室では該当する地点についての立会調査を実施している。2015年度は3月25日に1箇所のみ立会調査を実施したが、遺構・遺物などは確認されていない。この立会調査は2016年度まで継続している。この立会調査の内容については、来年度刊行予定の『年次報告』2016に掲載したい。

・課外活動施設外構工事（2015-13）

2016年1・2月にかけて、課外活動施設の外構工事に伴う立会調査を実施した。近世以前の遺構等は確認されていない。ただし、西側の電気設備用ハンドホールに関しては、幕末～明治初頭の畠の耕作土と考えられる土層を確認したため、堆積状況等を確認するため断面図を作成している。なお、本体部の課外活動施設については、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第15地点（BK15）として調査している。この調査の概要については、『年次報告』2014に掲載した。

（2）川内南地区の調査

川内南地区では、立会調査3件を実施した（図8）。

a. 立会調査・その他

・川内南団地案内看板設置工事（2015-1）

川内南団地内の主要道路に、減速帯及び減速帯の段差注意喚起のための案内看板を、設置することに伴う工事である。掘削深度が浅く、現表土内に収まる範囲内であったので問題はなかった。

・植物園記念館外灯改修工事（2015-5）

植物園記念館前の外灯が腐食倒壊したことによる再設置工事である。掘削範囲は、以前の掘削の範囲に収まり問題はなかった。

・植物園周辺環境整備（舗装）工事（2015-10）

植物園に至る道路の傷んだ舗装を改修する工事である。新規舗装は全く無く、舗装のやり替えであるので全く問題はなかった。

・その他

その他に慎重工事の指示を受けたものとして、萩ホール舗装改修工事（2015-8）、国際センター駅前看板移設工事（2015-9）があった。どちらの地点も、掘削深度が浅いものである。

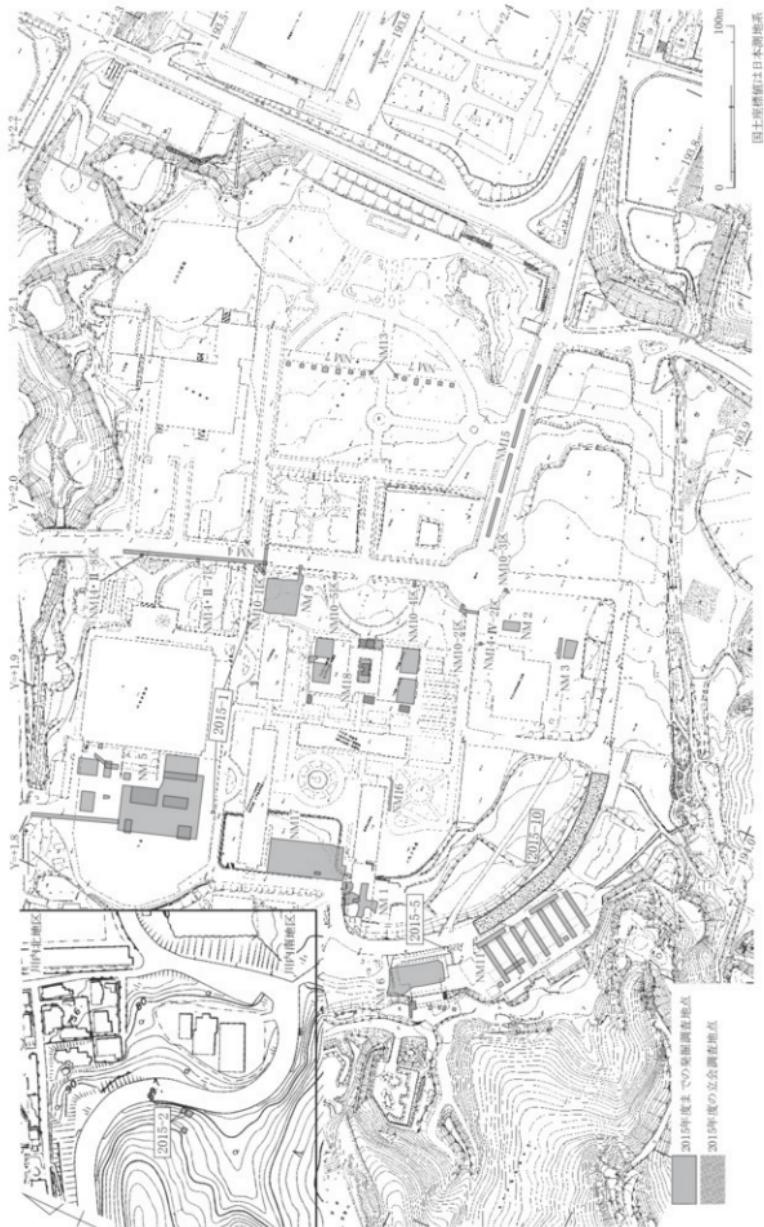


圖8 川內兩地區調查地點

(3) 青葉山北地区の調査（図9）

理学研究科・薬学研究科などが所在する青葉山北地区では、本調査1件、立会調査2件を実施した。

a. 青葉山E遺跡第10次調査（AOE10・屋外環境整備（駅前広場）に伴う調査）

・調査の経緯と経過

この調査は、仙台市高速鉄道（地下鉄）東西線青葉山駅から理学研究科に至る歩道などの整備工事に伴うものである。この工事では、青葉山体育館東側に歩道を設置する部分と、市道沿いの法面を整える区域がある。これらの主な区域は、周知の遺跡である青葉山E遺跡の範囲内にあたることから、全面的な本調査を実施した。また、調査区南端部に関しては、青葉山E遺跡の範囲外ではあるが、遺跡隣接地として確認のため発掘調査範囲に含め、同時に試掘調査として実施した。調査期間は7月1日から10月30日であり、調査面積は856.9m²となった。

当初の予定では、南西側の歩道部分の調査を先行して7～8月に実施し（西区と呼称）（図10）、北東側の法面部分の調査は、その後の9～10月に実施することにした（東区と呼称）。西区内には、青葉山・川内キャンバスに供給されるメインの高圧送電線と水道管が位置している。これらの配管に関しては、8月末に実施される定期設備点検のための一斉停電に合わせ、切り替えることとなっていた。そのため、その配管の位置を確認した上で、その周辺を7月末までに調査を終了しなければならない日程となった。

7月1日から西区において重機による表土除去を始めた。その後、西区北側において、高圧送電線と水道管を発見すると共に、切り替え工事に必要な範囲を確定し、その周囲に関する発掘調査を進めた。この区域では、トレンチを設定し造構や遺物の確認を行った。その結果、自然の沢状の地形や風倒木跡は確認したが、遺物はほとんど出土しなかったため、旧地形と土壤の堆積状況を確認して終了した。

8月からは、西区南側に関して同様に調査を行ったが、大体の地区では、遺構等が確認できず、土器破片が極少数確認できたのみであった。ただし、南側の限られた地域のみにまとまった土器片が確認できたことから、その後に拡張して精査を行った。西区の調査面積は合計655.9m²となった。

8月末からは東区において重機による表土除去を行い、9月から精査を始めた。この東区においても工事業者側の都合により、調査区を西半分と東半分に分けて調査をすることになった。先に西側の精査を完了させ、10月9日に業者に引き渡した。東側については10月末まで精査を行い、調査を終了させた。この東区の調査面積は200.7m²である。最終的には、青葉山E遺跡第10次調査の調査面積は856.6m²となった。

・基本層序

基本層序は、青葉山E遺跡第9次調査（『調査報告』4）の層位とはほぼ同様である。

盛上 大学等による現代の盛土層。

1層 自然堆積の旧表土層と考えられるシルト質の土層である。また、調査区西側南端部の遺物集中出土地区では、1層を1a層と1b層に細分した。

2層 楠文時代の遺物包含層と考えられるシルト質の土層である。2a層と2b層に細分した。上部は黒色土、下部は黄色土が主体となる。全体的にしまりが無い柔らかい土質である。

3層 始良丹沢火山灰（AT）を含む粘土層であり、3a層と3b層に細分できる。所謂暗色帶は3b層に相当する。

4層 上部に川崎スコリアを含む粘土層である。

5層 やや橙色味が強い粘土層である。

6層 安達愛島軽石層に相当する。6a層～6c層に細分でき、そのうち6c層は更に細分できる。今回は明確な愛島バミスは確認できなかったが、6b層について蟹澤聰史東北大名譽教授に土壤を水洗・鑑定して頂いたところ、愛島軽石層に含まれるカミングトン閃石が確認されることから、安達愛島軽石の二次堆積である可能性が高いとご教示頂いた。

7層 青葉山段丘疊層である。

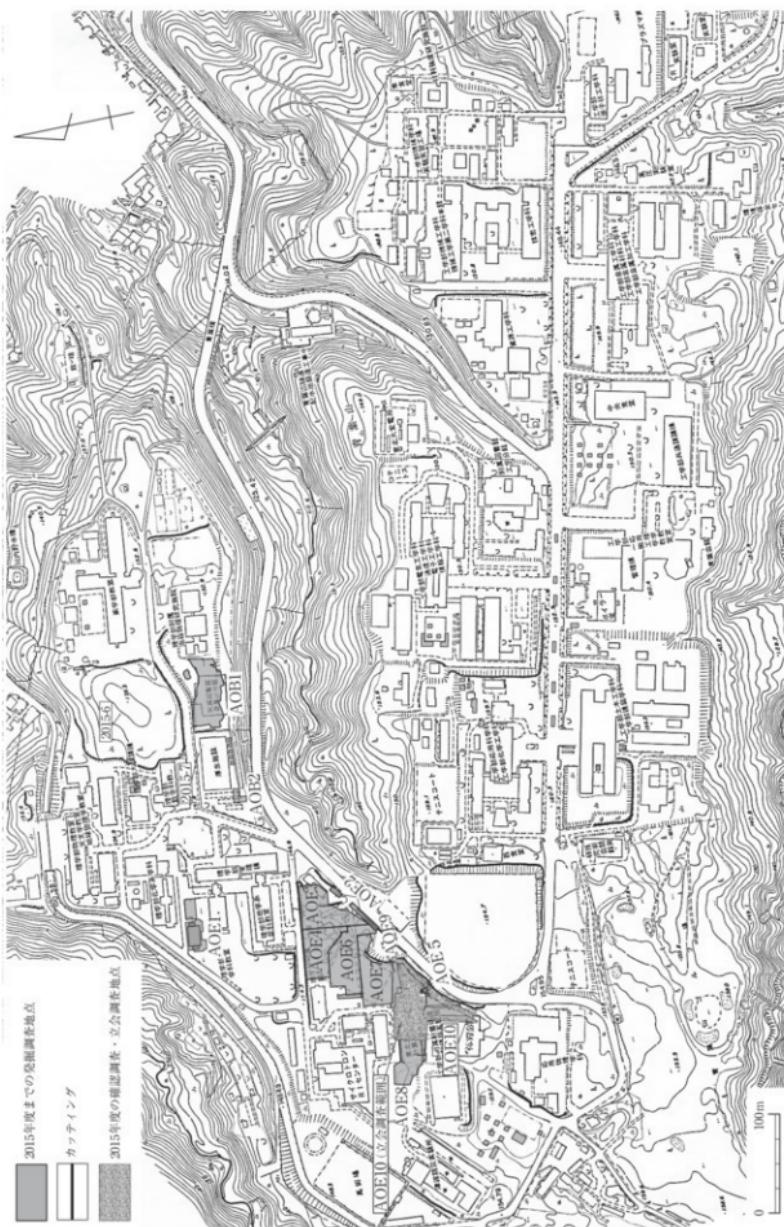


図9 青葉山地区調査地点

・調査成果

①西区

西区では、最初にトレンチによる遺物・遺構の確認を行った。北側では、遺物がほぼ確認できないことから、トレンチのみによる調査とした。南側では、遺物が多少ながら認められたことから、主要な遺物包含層である2a層の掘り下げを行い、遺物が確認された地点に関しては2b層まで掘り下げた。

西区では、2a層上面で土坑1基（1号土坑）、2a層掘り下げ中にさらに1基を確認した（2号土坑）。これらの土坑からは遺物が出土しておらず、時代・時期は全く不明である。その他には、風倒木や沢状地形を確認した。風倒木は、いずれも2a層上面で検出した。沢状地形は、調査区を東西に横断し、その南北が岸部となる。この沢は、西から東に傾斜していることを確認した。

②西区南端部（遺物集中出土地区）

遺跡範囲隣接地の西区南端部では、縄文・弥生時代の遺物集中出土地点が認められた。この地区に関しては、遺構・遺物の確認のため、可能な限り調査区を拡張した。

この区の北・南・東側は、すでに破壊されていた。西側は、今回の工事の影響範囲外である舗装歩道があるため、拡張していない。層位は、現代の盛土の下にこれまでの調査で旧表土層として捉えていた1層があり、その下に縄文時代早期・中期の遺物包含層である2層が確認できた。3層以下はローム層である。1層は、1a層と1b層に細分した。これまで1層と捉えてきた調査区全面に広がる層を1a層とした。土質は1a層と類似するが、その下部に位置し、やや黒みのある層を1b層とした。また2層は、これまでの調査通り、2a層と2b層に細分した。

遺物は、1a層から出土し始めた。当初はグリッドごとに遺物を取り上げていたが、数量的に多く確認できたことから、途中からトータルステーションにより位置を記録する方法に切り替えた。1b層からは大型の土器も確認できた。この大型の土器の南側はすでに破壊されているが、出土状況から埋設土器である可能性を考え、平面・断面両面から精査をしたが、掘込などは確認できなかった。

確認できた遺物には、縄文土器・弥生土器・石器等がある。遺物として点取りで上げた点数は76点（自然疊含む）となる。また、当初にグリッドごとに上げた遺物が1a層出土のものが6点あるので、遺物集中出土地区から出土した遺物は合計82点となる。弥生土器には、1a層と1b層から出土している弥生時代後期の天王山式土器の口縁部・頸部破片である（図11）。接合はせず、散漫な分布であることから、別地点から流入したものと考えられる。その他には、石鏃・剥片・チップ等の石器類も出土している。

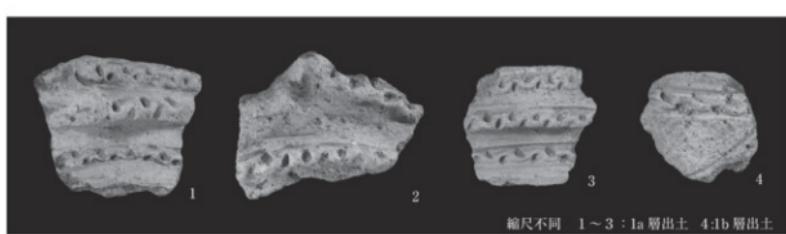
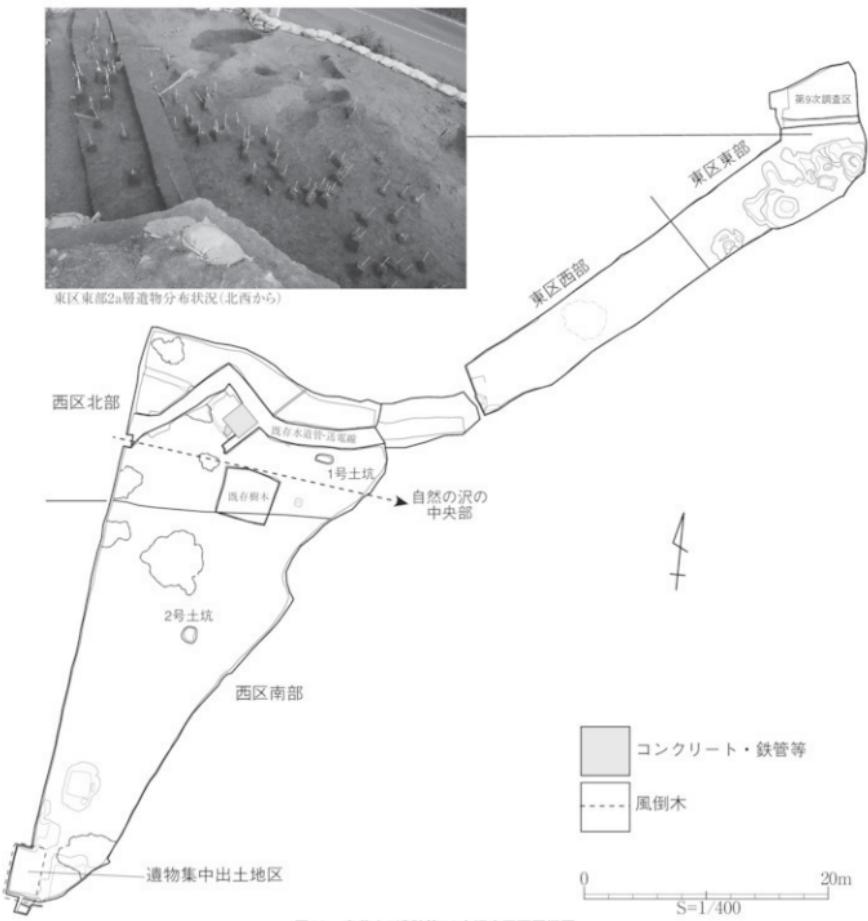
③東区

東区は、前回の第9次調査区に隣接している。この調査区は、原生の木の根や風倒木跡により搅乱を受けていたが、遺物包含層は良好に残っていた（図10）。

2a層から順次掘り下げ、出土した遺物に関してはトータルステーションにて測量し1点ずつ取り上げている。おおむね、第9次調査区に隣接する地点において、2a層中に縄文中期の遺物が集中する傾向があり、西側に向かい次第に遺物は出土しなくなる。2b層からは、縄文早期の上器片が出土しているが、本調査区では非常に少ない。それから、旧石器時代の遺物確認のため3層を掘り下げ、おおむね4層上面を検出した段階で精査を終了した。また、地層の堆積状況の確認のため、深堀トレンチを設定し、基本層序に示した堆積状況を確認した。

④まとめ

今回の調査区では、西区においては自然の沢地形を確認すると共に、沢を挟んで西区南端部にて天王山式土器を確認することができた。東区では、第9次調査と同様の遺物出土状況を確認した。今回の調査では、自然の沢状地形等の旧地形のあり方や時期の異なる遺物の広がりから、当時の場の使い方について把握できる貴重な資料を得たものと考えられる。



b. 立会調査

・理学部憩いの広場実験機器設置工事（2015－6）

本工事は青葉山B遺跡範囲内において、学生が実験機器を設置することに伴う工事であるが、6月3日に担当部局から相談無く無届で掘削されてしまった。この無届掘削は、当該学部の事務職員、教員・学生間の連絡確認が不充分であることに起因したものである。この掘削の後に、施設部担当者が状況を把握し、埋蔵文化財調査室と協議した上で、現地確認し、9月8日に改めて埋蔵文化財発掘の届出を提出した。その届出に添付する形で、東北大学総長名（施工責任者：理学部・理学研究科事務部長）の始末書（9月2日付）を仙台市教育委員会に提出した。仙台市教育委員会からは、文章をもって厳重注意がなされた。掘削は、掘削深度30cm、面積0.12m²であったが、幸運にも遺構・遺物等は確認されていない。

こうした文化財保護法に違反する無届工事が実施されたという事態を受け、改めて学内関係部局に対して、注意を喚起する必要があることは明らかであった。この事態の直後、10月15日に施設部長と埋蔵文化財調査室長の連名で、本部事務機構各部長と各部局事務（部）長宛に「土木工事のための発掘に関する届出について（通知）」との文章を出し、周知の埋蔵文化財包蔵地における掘削を伴う工事にあたって、文化財保護法第93条による届出を遺漏なく行うよう要請した。

・環境整備（理学部舗装等）工事（2015－7）

この工事は、青葉山B遺跡の範囲内に所在する厚生会館前にスロープを設置することに伴うものである。すでに遺物包含層等は削平されており、地山面が確認された。遺構等も確認できず問題はなかった。

2. 遺物整理作業

2015年度は、次の4件の整理作業を実施した。

a. 仙台城跡北方武家屋敷地区第16地点（BK16）の整理作業

2013年度に調査した、学生支援センター新館に伴う調査である。二の丸に伴う堀や、近世の構などが検出され、それらの遺構から、陶磁器類などが19箱出土している。2015年度は、測量図面・遺構写真の編集、遺構の年代の検討、遺物実測図・写真撮影、観察表作成、レイアウトなどの作業を実施した。本調査の整理作業は当年度で終了した。

b. 仙台城跡二の丸地区第18地点（NM18）の整理作業

2013・2014年度に調査した国際文科系教育研究拠点施設整備計画に伴う確認調査である。ごく一部を除いて江戸時代の地層は掘削しておらず、明治時代以降の地層を掘削した。そのため、近代以降の遺物が中心であるが、調査区によっては、本米の地層に伴うものではないが、近世の遺物が多数含まれていた。陶磁器類などが28箱出土している。2015年度は、空撮測量図面や手書き図面の整理、遺物の注記・接合・分類などの基礎的作業を実施している。

c. 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第15地点（BK15）の整理作業

2012～2014年度に調査した課外活動施設新館に伴う調査である。調査面積が1503m²と広く、多種多様な遺構が検出されている。それに伴う遺物も115箱と非常に多い。2015年度は空撮測量図面や手書き遺構図面の整理などの作業を行っている。

d. 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第14地点（BK14）の整理作業

川内駅前広場整備工事に伴う調査である。2011・2012年度、2014・2015年度と、他の調査との兼ね合いによる一時中断をはさんで調査を行った。井戸や建物跡、溝、柱列など、多くの遺構が検出され、遺物も79箱出土している。2015年度は、空撮測量図面や断面図の整理などの作業を行っている。

3. 年次報告・調査報告の刊行

2015年度は、『年次報告』1冊、『調査報告』1冊の、合計2冊を印刷刊行した。

『年次報告』としては、『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』2014を印刷刊行した。2014年度に調査室が行った各種事業と、本調査2件、試掘調査2件、立会調査12件の概要を掲載した。

『調査報告』としては、『仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点』（東北大学埋蔵文化財調査室調査報告5）を印刷刊行した。2013年度に実施した学生支援センター新館に伴う発掘調査成果を取りまとめたものである。

4. 保存処理事業

東北大学埋蔵文化財調査室では、仙台城跡の出土遺物を中心に、木製品・漆塗製品・金属製品など、保存処理を必要とする遺物を多数保管している。木製品・金属製品については、当調査室で保存処理を進めている。木製品については、1997年度以降、糖アルコール法によって処理している（『調査年報』16）。

2011年度までの作業によって、一部の大型製品を除くと、2010年度までの調査で出土した木製品については、保存処理は終了している。2011年度以降の調査では、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第14地点（BK14）、第15地点（BK15）などで木製品が出土しており、出土直後の応急対応と、その後の保存処理を行っている。これらのが本格的な保存処理は、整理作業が進んだものから、順次行う予定である。

銅製品は、2012年度までの作業によって、2010年度調査以前に出土したものについては、保存処理を終了している。しかし、保存処理体制が整う2000年度以前の調査で出土した銅製品を再確認したところ、未処理のままとなっていた資料が若干確認された。そのため2012年度から計画的にこれらの銅製品の保存処理作業を行っており、2015年度は残る銅製品の処理を行った。また、2015年度の発掘調査で出土した銅製品の応急対応を行った。

鉄製品については、釘をはじめとして大量の遺物が出土しているが、図化して報告した資料以外は、ほとんどが未処理のままである。前年度に引き続き、これら未処理のままとなっていた鉄製品の状況を確認するとともに、保存処理を行っている。今後も、継続して作業を行っていく予定である。また、2015年度の発掘調査で出土した鉄製品の応急対応も行った。

5. 資料保管状況

東北大学埋蔵文化財調査室では、ほとんどの遺物は容量30.3リットルのコンテナ（ポリプロピレン製・サンボックス#32）に収納している。このコンテナに入らない大型のものについては、さらに大きなコンテナや、適宜木箱を作成して収納している。また2009年度より、収蔵用の箱に木製箱を採用している。油脂製のコンテナは、火災の際に甚大な被害を受けるのに対して、木製箱は耐熱性が高く火災時に燃焼するまでの時間が長いことが明らかとなっている。そのため東北大学埋蔵文化財調査室では、整理作業後の収蔵保管にあたっては、油脂製箱から木製箱へ取り替えていくこととし、2009年度から一部は木製箱へ詰め替えを行っている。

遺物の全体量を把握するために、容器の種類や大小にかかわらず、箱の数で数量を管理している。ただし、木製品や金属製品など保存処理を行う必要のあるものは、別に保管しているため、この中には含まれていない。埋蔵文化財調査委員会が発足した1983年度からの、遺物総量の推移を箱数で比較したのが、表4、図12である。

2015年度の調査によって新たに増加した箱数は、84箱である（武家屋敷地区第14地点79箱・青葉山E遺跡第10次調査5箱）。2015年度には、川内北地区の武家屋敷地区第16地点の整理作業が完了した。整理後は詰め直しにより14箱となった。そのため、整理報告済みの箱数は14箱増加して2857箱となった。未整理のものは、差し引きで65箱増加し319箱となった。合計の遺物総量は、3176箱である。この内、整理・報告済みのものの比率は90.0%である。

表4 年度ごとの収蔵遺物箱数の推移

年 度	未整理箱数	整理済箱数	合計箱数	備 考
1983	104	0	104	
1984	4	104	108	年報1 (1983年度調査分) 刊行
1985	113	108	221	年報2 (1984年度調査分) 刊行
1986	245	108	353	
1987	293	108	401	
1988	920	108	1,028	
1989	811	221	1,032	年報3 (1985年度調査分) 刊行
1990	1,218	221	1,439	
1991	1,086	401	1,487	年報4・5 (1986・87年度調査分) 刊行
1992	463	1,028	1,491	年報6 (1988年度調査分) 刊行
1993	732	1,032	1,764	年報7 (1989年度調査分) 刊行
1994	742	1,032	1,774	
1995	861	1,032	1,893	
1996	469	1,439	1,908	年報8 (1990年度調査分) 刊行
1997	435	1,491	1,926	年報9・10 (1991・92年度調査分) 刊行
1998	236	1,774	2,010	年報11・12 (1993・94年度調査分) 刊行
1999	117	1,893	2,010	年報13 (1995年度調査分) 刊行
2000	751	1,926	2,677	年報14・15・16 (1996・97・98年度調査分) 刊行
2001	1,216	1,926	3,142	年報17 (1999年度調査分) 刊行
2002	1,234	1,926	3,160	
2003	491	2,370	2,861	二の丸第17地点整理後詰め直し等で箱数減少
2004	491	2,370	2,861	年報18 (2000年度調査分) 刊行
2005	472	2,384	2,856	年報19-1・20 (2001・02年度調査分) 刊行
2006	467	2,391	2,858	年報19-3・21 (2001・03年度調査分) 刊行
2007	281	2,507	2,788	年報19-4・22 (2001・04年度調査分) 刊行
2008	198	2,619	2,817	年報19-2・23 (2001・05年度調査分) 刊行
2009	34	2,790	2,824	年報19-5・24 (2001・06年度調査分) 刊行 地下鉄補償関係調査整理作業終了
2010	34	2,790	2,824	
2011	78	2,790	2,868	調査報告1 (武家屋敷地区第11・12地点) 刊行
2012	65	2,836	2,901	調査報告2 (武家屋敷地区第13地点) 刊行
2013	116	2,838	2,954	調査報告3 (芦ノ口道路第7・8次調査) 刊行
2014	254	2,843	3,097	調査報告4 (青葉山E道路第9次調査・芦ノ口道路第9次調査) 刊行
2015	319	2,857	3,176	調査報告5 (武家屋敷地区第16地点) 刊行

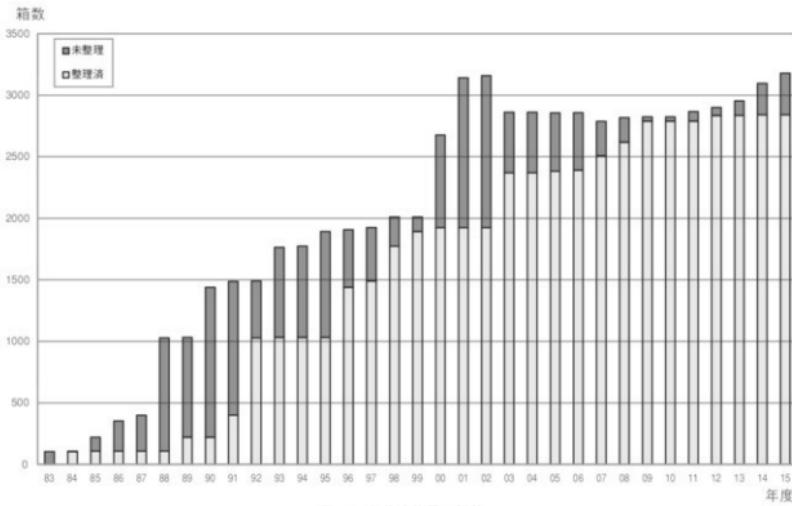


図12 収蔵遺物量の推移

6. 研究活動

(1) 受託研究・共同研究・研究協力等

2015年度は、下記の受託研究1件を実施した。

受託者：岩手県山田町長 佐藤信逸（担当：山田町教育委員会生涯学習課文化係）

研究課題：房の沢古墳群出土金属製品保存処理についての研究

研究目的：岩手県指定文化財房の沢古墳群出土品のうち、脆弱化が進む金属製品を恒久的に保存するため、より効率的な保存処理方法の研究を行う。

対象資料：房の沢古墳群 RT07古墳主体部出土蔵刀頭（109） RT15古墳主体部出土鉸具（170）

（括弧内の番号は発掘調査報告書の掲載番号）

研究内容：（1）保存処理方法構築のためのモニタリングテスト （2）金属製品保存処理

研究期間：2016年9月1日～2017年3月25日

研究経費：1,080,000円

実施体制：研究担当者として菅野智則のほか、藤澤敦（東北大学総合学術博物館）、松井敏也（筑波大学大学院人間総合科学研究所）の指導を得て、埋蔵文化財調査室の千葉直美が主に実施し、大内真希が補助した。

その他：2015年11月19日に資料検討会を実施した。参加者は、川向聖子（山田町教育委員会）、菅野智則、千葉直美、藤澤敦、松井敏也の5名である。

研究内容

a. 保存処理方法構築のためのモニタリングテスト

最適な脱塩処理方法を選定するため、サンプルを用いてモニタリングテストを行った。

①充填樹脂耐熱性実験

本資料には、破片の接合や欠損箇所の充填にエポキシ系合成樹脂が使用されている。資料を加温処理した際に、それらの樹脂にどのような影響があるか確認することを目的として実験した。この実験の結果、アラルダイトで接合した箇所や、アラルダイトとマイクロバルーンを混合した充填剤で充填した欠損部分は、加温処理した場合、熱による影響を受けることが確認できた。とくにアラルダイトとマイクロバルーンを混合した充填剤は、30°Cでも影響を受けるため、加温処理を行う場合は処理前に充填剤を除去することが望ましいことが判明した。

②加温脱塩処理実験

加温による脱塩効果を確認するため、条件を変えて実験し、それらの条件の違いにどの程度差があるのか確認することを目的として実験した。この実験の結果、純水浸漬脱塩法で短時間に効率よく脱塩するためには、純水浸漬前のスチーム処理と、熱対流を利用した脱塩処理法の併用が効果的であると判断できた。

b. 金属製品保存処理（図13）

①現状調査

処理に先立ち、再処理時の接合箇所および樹脂充填箇所の位置、有機質等の付着物等の種類や位置・特徴などを再確認するとともに、新たに発生したさびの位置を確認し、処理前資料写真を撮影した。

②X線透過撮影

肉眼では観察できない資料の形状や亀裂、腐食の程度を確認するため、資料のX線透過撮影を行った。

③再クリーニング

新たに発生したさびを実体顕微鏡下でデザインカッター、グラインダー、エアブラシ等を用いて除去した。また、処理過程でエポキシ系合成樹脂の軟化が懸念されたため、接合箇所や充填箇所の樹脂は可能な限り除去した。また補色絵の具についても処理過程での溶解が避けられないため、有機溶剤（アセトン）等を用いて除去した。

④脱脂処理

合成樹脂を除去するためには有機溶剤のアセトンを用いるが、アセトンは強力な溶剤であるため、前回の含浸樹脂により強化されて形状を保っている部分も解除され、資料がより脆弱な状態となり崩壊する懼れもあった。そこで、今回の脱脂処理では有機溶剤でもアセトンより脱脂効果が緩やかなソルベントナフサを用いることとした。資料を不織布や包帯等で養生し、ソルベントナフサに浸漬した。浸漬終了後、資料の養生を解除し、破片の脱落状況を確認した。

⑤-1 脱塩処理—スチーム処理—

スチームクリーナー（アイリスオーヤマ コンパクトタイプ STM-304W）に純水を入れ、約100°Cの高温スチームを資料にまんべんなく当て、資料の亀裂等に発生した新たなさびの要因のひとつである塩化物イオン等を洗い流した。

⑤-2 脱塩処理—熱対流を利用した純水浸漬法—

破片の不要な脱落や紛失等を防ぐため資料全体を包帯・不織布等で養生した。ステンレス槽の底に水中ヒーター（グラフトカーボン 922D90）をセットし、純水（防錆剤として純水の0.5wt%量のベンゾトリアゾール（BTA）を2倍の容量のエチルアルコールに溶解させたものを添加）を入れ、資料を浸漬した。ヒーターは30°Cに設定し、加温のオンオフを繰り返して熱対流が起こるようにした。3日間浸漬後、以降はBTAを添加しない純水を用意し、同様の設定で資料を浸漬し直すことを繰り返した。脱塩状況の確認のため、定期的に浸漬水の導電率の測定や塩素イオン検知管による塩素イオン濃度の測定およびイオンクロマトグラファーによる陰イオンの定量分析を実施した。それらの値が低く一定となるまでを脱塩終了の目安とした。なお、大気中の酸素が純水に溶け込むのを防ぐため、水面にビニールを敷いた。

⑥脱水処理

次工程の合成樹脂含浸の前に、資料中に含まれる水分を完全に除去するために、エチルアルコールに資料を浸漬した。その後、完全なる置換を図るため、再度新たなエチルアルコールに資料を浸漬した。乾燥後、資料の養生を解除し、破片の脱落状況を確認した。

また、脱塩処理中に資料表面等に沈着したさびをエチルアルコールで除去することを試みたが、今回の処理では脱塩液として途中から防錆剤であるベンゾトリアゾールを添加せずに純水のみを用いて実施したため、資料表面およびの亀裂部分へのさびの沈着が激しく、場合によっては資料にエアブラシをかけて沈着さびを除去した。

⑦合成樹脂含浸

資料の強化および外気との遮断のため、アクリル系合成樹脂（バラロイドNAD10）を資料に含浸した。バラロイドNAD10・ソルベントナフサ20%溶液に資料を浸漬し、減圧含浸したのち常圧含浸した。合成樹脂のコーティング効果を高めるため、乾燥後、再度同様の樹脂含浸を行った。

⑧接合・修復・補色

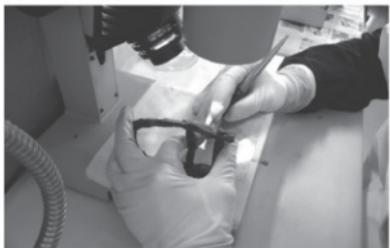
脱落した破片をエポキシ系接着剤（アラルダイトラピッド）を用いて接合した。欠損部に関しては強度を保つ上での必要最小限部分のみをエポキシ系接着剤で充填し、大きく広がった亀裂部分等に関してはエポキシ系接着剤に增量剤（マイクロバルーン）を混合したもので充填した。必要に応じ、接合・充填箇所を違和感がない程度に補色した。

⑨写真撮影

処理後の資料写真を撮影した。

c. 報告書作製

これらの作業内容について報告書を作成し、山田町に提出した。



1. 再クリーニング（デザインカッター）



2. 再クリーニング（グラインダー）



3. スチーム処理



4. 加温脱塩処理



5. 加温脱塩処理



6. 合成樹脂減圧含浸



7. 接合・充填



8. 染色

図13 金属製品保存処理

(2) 学会発表等

2015年度に実施した、調査室の業務に関わる学会での研究発表等としては、以下の1件を行った。

- ・平成27年度宮城県遺跡調査成果発表会 2015年12月12日 於：東北歴史博物館 主催：宮城県考古学会
「仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第14地点の調査」口頭発表

(3) 科学研究費採択状況

2015年度は採択されていない。

7. 教育普及活動

(1) 非常勤講師

2015年度に、当調査室の文化財調査員で、非常勤講師を担当したものは無い。

(2) 授業など教育活動への協力

2015年度の学内外での授業などの教育活動への協力としては、2件実施した。

- ①国際文科研究科の深澤百合子教授が担当する授業（科学と情報「考古学でとく『科学』以前の科学」）において、発掘調査現場の見学が4月22日に行われている。仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第14地点の調査現場にて、発掘調査の状況などを解説した。二回実施し、参加人数は63名であった。
- ②9月14日には、総合学術博物館が実施している実習（博物館学実習Ⅵ「館園実習」）が埋蔵文化財調査室にて実施された。当室における考古学資料の収藏・保存の実際について講義を行った。参加者は22名である。

(3) 保管資料の貸出

2015年度における、調査室保管資料の貸し出し依頼はなかった。

(4) 外部からの派遣依頼等

当調査室の業務に関わって、あるいは文化財調査員の専門領域に関わる事項で、外部から派遣等の依頼があつたのは、下記のとおりである。

担当者：菅野智則

- ・機関の研究計画に基づく共同研究プロジェクト「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性・歴史生態学からのアプローチ」 総合地球環境学研究所 共同研究員
2015年4月10日～12日（於岩手県宮古市） 岩手県資料調査等
- 2015年5月3日～17日（於カナダ・ブリティッシュコロンビア州） カナダ・トリンキット島における発掘調査
- 2015年5月27日（於奈良文化財研究所） カナダ・トリンキット島における発掘調査後ミーティング
- 2015年6月25・26日（於総合地球環境学研究所） 小規模経済プロジェクト長期変化班縄文部会会議
- ・科学研究費助成事業「気仙地域の歴史・考古・民俗学的総合研究」 代表：石川日出志 研究協力者
2015年6月13・14日（於盛岡市上田公民館） 古代貝塚の資料集成打ち合わせ
- ・第99回歴博フォーラム「縄文時代・文化・社会をどのように捉えるか？」 主催：国立歴史民俗博物館 講師
2015年12月6日（於明治大学リバティタワー） 「東日本の縄文文化—東北地方を中心に—」口頭発表
- ・「花巻の遺跡を学ぶ会」 主催：花巻市教育委員会 講師
2016年2月11日（於花巻市生涯学園都市会館） 「北上川流域における縄文時代中期集落の特徴とその特異性」口頭発表

- ・全国遺跡報告総覧シンポジウム「文化遺産の記録をすべての人々へ！—発掘調査報告書デジタル化の方向性を探る—」 主催：全国遺跡報告総覧プロジェクト 講師

2016年2月18日（於奈良文化財研究所）「東北地方における全国遺跡報告総覧の展望」口頭発表

（5）広報活動

- ・川内蔵ホール展示ギャラリー常設展

東北大學川内南キャンパスにある「東北大學百周年記念会館（川内蔵ホール）」には、エントランスホールに展示ギャラリーが設けられている。この展示ギャラリーは、本部総務部広報課が事務担当となり、学内からの公募によって、学内の研究資料や研究成果を紹介するために使用されている。しかし、年間を通じた全ての期間を、公募の展示で構成することには困難が伴うことから、一定期間を常設展とすることになった。東北大學史料館が中心となり、植物園・埋蔵文化財調査室が協力し、川内キャンパスの歴史を基本テーマとする常設展「川内今昔物語」を2011年度から行っている。ただし、東北大學のホームカミング・デーなどのイベントの際には、関連する展示などが行われるため、展示を一旦撤収したりしている。

展示の内容は、これまでと基本的に同じ内容である。展示資料のほとんどは、埋蔵文化財調査室が保管している出土資料で構成されている。江戸時代の各種遺物が中心であるが、繩文時代・弥生時代・古代の遺物、近代の陸軍第二師団に関わる遺物も展示している。

- ・調査室ウェブサイト

2011年度から、東北大學の情報シナジー機構・サイバーサイエンスセンターのウェブホスティングサービスを利用し、埋蔵文化財調査室のウェブサイト（<http://web.tohoku.ac.jp/maibun/>）を2012年2月から公開した。このウェブサイトでは、当室の業務内容紹介、手続きに関する情報提供、遺跡発掘調査の経過報告、これまでに刊行した遺跡発掘調査報告書などの案内をしている。

調査室で刊行した調査報告書については、東北大學機関リポジトリ「TOUR」（<http://ir.library.tohoku.ac.jp/re/>）と「全国遺跡報告総覧（旧：遺跡資料リポジトリ）」（<http://sitereports.nabunken.go.jp/ja>）にて、pdfファイルが公開されている。調査室のウェブサイトでは、これらのリポジトリとリンクし、そちらを参照できるようにした。

- ・全国遺跡報告総覧における発掘調査報告書の公開

当調査室で行っている当学敷地内における埋蔵文化財調査に関する成果は、遺跡発掘調査報告書として刊行している。そして、報告書は、調査により確認された埋蔵文化財の唯一無二の記録として、保存の面を考慮し紙媒体として刊行されるものであり、「広く公開されて、国民が共有し、活用できるような措置を講じる必要があるもの」（文化庁文化財部記念物課監修2010「発掘調査のてびき」）とされている。しかしながら、紙媒体で刊行された報告書には部数に限りがあり、「広く公開」するという趣旨を考えれば、限界がある。

全国遺跡報告総覧プロジェクトは、紙媒体で刊行された報告書をpdfデータとして電子化し、更に広く公開・発信することを目的としている。このプロジェクトに協力することにより、当学敷地内における埋蔵文化財の調査成果を、日本国内のみならず広く世界へと発信することが可能となっている。これは、当調査室の規定の第2条で定められている様に、当学における「埋蔵文化財の活用」を推進する上で非常に重要な業務と考えられる。

この事業は、2008年度に、島根大学図書館を中心に中国地方5県域から、国立情報学研究所のCSI委託事業として開始された。2010年度以降は、全国遺跡資料リポジトリ・プロジェクトとして、対象を全国に拡大して進められてきた。そして、これまで連携大学で運用してきた遺跡資料リポジトリサイトを2015年6月25日より奈良文化財研究所において全国遺跡総覧として統合することになり、事業は継続されている。

東北大學附属図書館でも、2010年度からこの事業に参加し、宮城県内の発掘調査報告書をpdfファイルとして

ウェブサイトで順次公開してきた。埋蔵文化財調査室では、2010年度より東北大学附属図書館に協力し、調査室刊行の調査報告書を公開している。2015年度も、当年度に刊行した『年次報告』『調査報告』を登録して公開した。

8. 東日本大震災による被災文化財の救援活動

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、津波被災地域を中心に、甚大な被害が発生した。博物館・資料館、資料収蔵施設なども多くが被災し、膨大な量の文化財等が被害を受けた。個人所蔵の文化財の被害も、きわめて大きなものであった。これら被災した文化財を救援して後世に伝えることは、地域の歴史と文化を継承していくために不可欠であり、地域の復興のためにも欠かせない。そのため、被災文化財の救援活動（文化財レスキュー）が、様々な形で行われることとなった。被災文化財の救援活動は、被災した現地からの回収と安全な場所への運搬、劣化を防止するための応急処理、安定した環境での一時保管が当面の作業で、その上で本格的な修復、恒久的な施設での収蔵へとつながっていくこととなる。

埋蔵文化財調査室では、考古資料をはじめとする文化財の取り扱いに習熟し、保存処理の設備と技術を擁した専門家による機関として、被災文化財の救援活動を、震災支援の業務として行ってきた。2011年度には、文化庁が呼びかけて関係機関・団体で構成された東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会による文化財レスキュー事業に参加するとともに、NPO資料保全ネットワークへの機材貸与などの協力などを実行してきた。被災地からの文化財の回収と運搬、応急処理は2011年度でおおむね終了し、2012年度以降は、応急処理の終了した資料の一時保管を行っている。埋蔵文化財調査室では、石巻市石巻文化センター考古収蔵庫から回収された考古資料294箱の内の194箱、女川町マリンバル女川で展示されていた考古資料を継続して一時保管してきた。このうち女川町マリンバル女川で展示されていた考古資料については、旧女川第一小学校を利用する形で文化財を収蔵する体制が整ったことから、2014年3月18日に女川町に返却された。

石巻市では多数の文化財が被災したが、被災して使用されなくなった旧石巻市立湊第二小学校を改修して、レスキューされた文化財の仮収蔵施設としている。当調査室で一時保管してきた石巻文化センター考古資料も、2015年3月24日に、石巻市が依頼した運送業者によって旧湊第二小学校仮収蔵庫へ運搬され、4年ぶりに石巻市へ戻すこととなった。これによって、当調査室での被災文化財の一時保管は終了することとなった。

救援委員会の文化財レスキュー事業は終了したが、被災した博物館・資料館などの再建には、長期の時間を要することから、被災文化財の一時保管も長期にわたることとなる。そのため、文化財レスキュー事業を引き継ぎ、被災した宮城県内の文化財の保全を図るため、文化財レスキュー事業に関わる関係機関・団体との連携・協力の下に必要な活動を行うことを目的として、宮城県被災文化財等保全連絡会議が2011年10月に設置された。被災文化財等の一時保管施設、地元市町教育委員会などから構成されることとなり、一時保管施設である東北大学埋蔵文化財調査室も、保全連絡会議に参加することとなった。

2015年度には、連絡会議は次の3回開催され、埋蔵文化財調査室でも担当者が出席した。連絡会議では、活動状況、一時保管施設での資料管理状況などについて、情報交換や協議が行われている。

第12回宮城県被災文化財等保全連絡会議 2015年7月23日 於：東北歴史博物館

第13回宮城県被災文化財等保全連絡会議 2015年11月19日 於：東北歴史博物館

第14回宮城県被災文化財等保全連絡会議 2016年3月3日 於：東北歴史博物館

〈引用・参考文献〉

- 仙台市教育委員会 1994 「仙台市青葉区文化財分布地図」
- 仙台市教育委員会 1995 「仙台市太白区文化財分布地図」
- 仙台市史編さん委員会編 2006 『仙台市史 特別編7 城館』仙台市
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985~1994 『東北大学埋蔵文化財調査年報』1~7
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997~2006 『東北大学埋蔵文化財調査年報』8~18, 19-1, 20
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2007~2010 『東北大学埋蔵文化財調査年報』19-2・3・4・5, 21~24
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2010~2015 『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』2007~2014
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2011 『仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点・第12地点一仙台市高速鉄道東西線機能補償関係調査報告書一』東北大学埋蔵文化財調査室調査報告1
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2013 『仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点』
東北大学埋蔵文化財調査室調査報告2
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2014 『宮沢喜ノ口遺跡第7次調査・第8次調査』
東北大学埋蔵文化財調査室調査報告3
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2015 『芦ノ口遺跡第9次調査・青葉山E遺跡第9次調査—東日本大震災復旧事業関係調査報告書一』東北大学埋蔵文化財調査室調査報告3
- 宮城県教育委員会 1998 『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第176集

IV. 資料

1. 国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程

平成6年5月17日 規第56号

(趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

(目的)

第2条 調査室は、国立大学法人東北大学（以下「本学」という。）の特定事業組織として、本学の施設整備が円滑に行われるために、構内の埋蔵文化財に関する調査を行い、併せて資料の保管及びその活用を図ることを目的とする。

(職及び職員)

第3条 調査室に、次の職及び職員を置く。

室長

文化財調査員

特任准教授

事務職員

その他の職員

(室長)

第4条 室長は、調査室の業務を掌理する。

2 室長は、本学の専任の教授をもって充てる。

3 室長の選考は、第6条に規定する運営委員会の議を経て、総長が行う。

4 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(文化財調査員)

第5条 文化財調査員は、室長の命を受け、調査室の業務に従事する。

2 文化財調査員は、調査室の職員をもって充てる。

(運営委員会)

第6条 調査室に、その運営に関する重要事項を審議するため、運営委員会を置く。

2 東北大学の学内共同教育研究施設等の運営に関する規程（平成16年規第9号）第3条の規定は、運営委員会の審議事項等について準用する。

(運営委員会の組織)

第7条 運営委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一 キャンパス総合計画委員会の委員 若干人

二 発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授 若干人

三 発掘調査地に関連のある部局の教授又は准教授で、その都度委員長が指名するもの

四 施設部長

(委員長)

第8条 委員長は、室長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会の会務を総理する。

3 委員長は、必要があると認めるときは、運営委員会の同意を得て、委員以外の者を運営委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

(調査部会)

第9条 運営委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する専門の事項を調査審議させるため、調査部会を置く。

(調査部会の組織)

第10条 調査部会は、部会長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 調査室の特任准教授
- 二 文化財調査員
- 三 発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授 若干人
- 四 施設部計画課長
- 五 発掘調査地に関連のある部局の事務部の長

(部会長)

第11条 部会長は、室長をもって充てる。

2 部会長は、調査部会の会務を掌理する。

(委嘱)

第12条 第7条第1号から第3号まで並びに第10条第3号に掲げる委員は、室長が委嘱する。

(任期)

第13条 第7条第1号から第3号まで並びに第10条第3号に掲げる委員の任期は、2年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

2 前項の委員は、再任されることができる。

(幹事)

第14条 運営委員会に幹事を置き、施設部計画課長をもって充てる。

(事務)

第15条 調査室の事務については、国立大学法人東北大学事務組織規程（平成16年規第151号）の定めるところによる。

(補則)

第16条 この規程に定めるもののほか、調査室の組織及び運営に関し必要な事項は、室長が定める。

附 則

1 この規程は、平成6年5月17日から施行する。

2 東北大学埋蔵文化財調査委員会規程（昭和58年規第38号）は、廃止する。

3 東北大学公印規程（昭和46年規第17号）の一部を次のように改正する。

〔次のように〕略

附 則（平成16年4月1日規第207号改正）

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附 則（平成18年4月26日規第80号改正）

1 この規程は、平成18年4月26日から施行し、改正後の国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程の規定は、平成18年4月1日から適用する。

2 平成18年4月1日（以下「適用日」という。）の前日にセンター長の任にある者は、適用日において改正後の第4条第3項の規定により室長となったものとみなし、その任期は、同条第4項の規定にかかわらず、平成18年5月16日までとする。

附 則（平成19年4月1日規第76号改正）

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附 則（平成25年4月23日規第56号改正）

この規程は、平成25年4月23日から施行し、改正後の第7条第1項の規程は、平成25年4月1日から適用する。

附 則（平成27年3月23日規第18号改正）

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

2. 東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会委員名簿（2015年度）

委員長 室 長（文学研究科 教授）	阿子島 香 満
委 員 キャンパス総合計画委員会（川内キャンパス環境整備協議会・国際文科研究科長）	高 橋 礼 裕
キャンパス総合計画委員会（青葉山キャンパス環境整備協議会・理学研究科長）	早 坂 忠 裕
キャンバス総合計画委員会（キャンバスデザイン室特任教授）	杉 山 義 重
学術資源研究公開センター 教 授	藤 澤 敦
学術資源研究公開センター 准教授	高 嶋 札 詩
文学研究科 教 授	柳 原 敏 昭
文学研究科 准教授	鹿 又 喜 隆
文学研究科 准教授	堀 裕
工学研究科 准教授	飛ヶ谷 潤一郎
災害科学国際研究所 准教授	佐 藤 大 介
施 設 部 長	藤 井 隆
幹 事 施 設 部 計画課長	森 井 敦 也

3. 東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会調査部会委員名簿（2015年度）

委員長 室 長（文学研究科 教授）	阿子島 香 満
委 員 学術資源研究公開センター 教 授	藤 澤 敦
学術資源研究公開センター 准教授	高 嶋 札 詩
文学研究科 教 授	柳 原 敏 昭
文学研究科 准教授	鹿 又 喜 隆
文学研究科 准教授	堀 裕
工学研究科 准教授	飛ヶ谷 潤一郎
災害科学国際研究所 准教授	佐 藤 大 介
埋蔵文化財調査室 文化財調査員（特任准教授）	菅 野 智 則
埋蔵文化財調査室 文化財調査員（専門職員）	柴 田 恵 子
埋蔵文化財調査室 文化財調査員（専門職員）	石 橋 宏
施 設 部 計画課長	森 井 敦 也

4. 東北大學埋藏文化財調査室刊行報告書一覧

〈東北大學埋藏文化財調査年報〉

書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大學埋藏文化財調査年報1	1985	昭和58年度（1983年度）事業概要 仙台城跡二の丸第1地点 (NM 1)	東北大學埋藏文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第2地点 (NM 2)	
		仙台城跡二の丸第3地点 (NM 3)	
東北大學埋藏文化財調査年報2	1986	昭和59年度（1984年度）事業概要 青葉山B道路第1次調査 (AOB 1)	東北大學埋藏文化財調査委員会
		青葉山B道路第2次調査 (AOB 2・旧称AOF)	
		青葉山E道路第1次調査 (AOE 1)	
東北大學埋藏文化財調査年報3	1990	昭和60年度（1985年度）事業概要 仙台城跡二の丸第6地点 (NM 6)	東北大學埋藏文化財調査委員会
		芦ノ口道路第1次調査 (TM 1)	
		芦ノ口道路1976年考古学研究室による調査 (TK) 研究編－東北地方における近世窯業と陶器をめぐる問題はか	
東北大學埋藏文化財調査年報4・5	1992	昭和61年度（1986年度）事業概要 昭和62年度（1987年度）事業概要 仙台城跡二の丸第4地点 (NM 4)	東北大學埋藏文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第5地点 (NM 7)	
		仙台城跡二の丸第8地点 (NM 8)	
東北大學埋藏文化財調査年報6	1993	昭和63年度（1988年度）事業概要 仙台城跡二の丸第5地点 (NM 5)	東北大學埋藏文化財調査委員会
		平成1年度（1989年度）事業概要 仙台城跡二の丸第5地点 (NM 5) 付帯施設部分	
東北大學埋藏文化財調査年報7	1994	仙台城跡二の丸第5地点 (NM 5) 調査成果の検討 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第5地点 (BK 5) 川渡農場町西道路第1地点 (KW 1)	東北大學埋藏文化財調査委員会
		平成2年度（1990年度）事業概要 仙台城跡二の丸第9地点 (NM 9)	
		平成3年度（1991年度）事業概要 仙台城跡二の丸第10地点 (NM 10)	
東北大學埋藏文化財調査年報8	1997	平成3年度（1991年度）事業概要 仙台城跡二の丸第9地点 (NM 9)	東北大學 埋藏文化財調査研究センター
		平成3年度（1991年度）事業概要 仙台城跡二の丸第10地点 (NM 10)	
		芦ノ口道路第2次・3次調査 (TM 2・TM 3) 考察編－仙台城二の丸跡の考古学的調査－	
東北大學埋藏文化財調査年報9	1998	平成4年度（1992年度）事業概要 仙台城跡二の丸第13地点 (NM 13)	東北大學 埋藏文化財調査研究センター
		青葉山地区分布調査 研究編－相馬藩における近世窯業生産の展開	
		平成5年度（1993年度）事業概要 仙台城跡二の丸第12地点 (NM 12)	
東北大學埋藏文化財調査年報11	1999	仙台城跡二の丸第14地点 (NM 14) 青葉山E道路第2次調査 (AOE 2)	東北大學 埋藏文化財調査研究センター
		平成6年度（1994年度）事業概要 仙台城跡二の丸第15地点 (NM 15)	
		青葉山E道路第3次調査 (AOE 3)	
東北大學埋藏文化財調査年報13	2000	平成7年度（1995年度）事業概要 仙台城跡二の丸第11地点 (NM 11)	東北大學 埋藏文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第4地点 (BK 4) 青葉山E道路第4次調査 (AOE 4)	
		研究編－東北大學構内（仙台城二の丸跡）道路出土漆器資料の材質と製作技法	
東北大學埋藏文化財調査年報14	2001	平成8年度（1996年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第6地点 (BK 6) 青葉山E道路第5次調査 (AOE 5)	東北大學 埋藏文化財調査研究センター
		芦ノ口道路第4次調査 (TM 4)	
		平成9年度（1997年度）事業概要 仙台城跡二の丸第16地点 (NM 16)	
東北大學埋藏文化財調査年報15	2001	青葉山E道路第6次調査 (AOE 6)	東北大學 埋藏文化財調査研究センター

書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大埋蔵文化財調査年報16	2001	平成10年度（1998年度）事業概要 研究編－糖アルコール含浸法における予備実験	東北大 埋藏文化財調査研究センター
東北大埋蔵文化財調査年報17	2002	平成11年度（1999年度）事業概要	東北大 埋藏文化財調査研究センター
東北大埋蔵文化財調査年報18	2003	平成12年度（2000年度）事業概要 仙台城跡二の丸第17地点 (NM17)	東北大 埋藏文化財調査研究センター
東北大埋蔵文化財調査年報19 第1分冊	2006	平成13年度（2001年度）事業概要 戸ノ口遺跡第5次調査 (TM5) 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点 (BK7) 道橋	東北大 埋藏文化財調査研究センター
東北大埋蔵文化財調査年報19 第2分冊	2009	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点 (BK7) 陶磁器・土器・土製品・瓦	東北大埋蔵文化財調査室
東北大埋蔵文化財調査年報19 第3分冊	2007	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点 (BK7) 木簡・墨書きある木製品	東北大埋蔵文化財調査室
東北大埋蔵文化財調査年報19 第4分冊	2008	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点 (BK7) その他の遺物	東北大埋蔵文化財調査室
東北大埋蔵文化財調査年報19 第5分冊	2010	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点 (BK7) 分析・考察	東北大埋蔵文化財調査室
東北大埋蔵文化財調査年報20	2006	平成14年度（2002年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第8地点 (BK8) 青葉山E遺跡第7次調査 (AOE7) 青葉山E遺跡第8次調査 (AOE8)	東北大 埋藏文化財調査研究センター
東北大埋蔵文化財調査年報21	2007	平成15年度（2003年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点 (BK9) 戸ノ口遺跡第6次調査 (TM6)	東北大埋蔵文化財調査室
東北大埋蔵文化財調査年報22	2008	平成16年度（2004年度）事業概要	東北大埋蔵文化財調査室
東北大埋蔵文化財調査年報23	2009	平成17年度（2005年度）事業概要	東北大埋蔵文化財調査室
東北大埋蔵文化財調査年報24	2010	平成18年度（2006年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点 (BK10) 青葉山新キャンパス地区試掘調査	東北大埋蔵文化財調査室

〈東北大埋蔵文化財調査室調査報告〉

シリーズ名	書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大 埋藏文化財調査室 調査報告1	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地 区第11地点・第12地点 －仙台市高速鉄道東西横線能 捕閘開通調査報告書－	2011	東西縦横開閉係埋藏文化財調査の概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点 (BK11) 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点 (BK12) 川内地区の船団記載人名の検討 川内地区における江戸時代の道路の復元	東北大 埋藏文化財調査室
東北大 埋藏文化財調査室 調査報告2	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地 区第13地点	2013	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点 (BK13)	東北大 埋藏文化財調査室
東北大 埋藏文化財調査室 調査報告3	戸ノ口遺跡第7次調査・第8次 調査	2014	戸ノ口遺跡第7次調査 (TM7)・第8次調査 (TM8)	東北大 埋藏文化財調査室
東北大 埋藏文化財調査室 調査報告4	戸ノ口遺跡第9次調査・青葉山 E遺跡第9次調査－東日本大震 災復旧事業関係調査報告書－	2015	戸ノ口遺跡第9次調査 (TM9)・青葉山E遺跡第 9次調査 (AOE9)	東北大 埋藏文化財調査室
東北大 埋藏文化財調査室 調査報告5	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地 区第16地点	2016	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点 (BK16)	東北大 埋藏文化財調査室
東北大 埋藏文化財調査室 調査報告6	仙台城跡二の丸地区第18地点	2017	仙台城跡二の丸地区第18地点 (NM18)	東北大 埋藏文化財調査室

〈東北大学埋蔵文化財調査室年次報告〉

書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2007	2010	平成19年度（2007年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2008	2010	平成20年度（2008年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2009	2012	平成21年度（2009年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2010	2012	平成22年度（2010年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2011	2013	平成23年度（2011年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2012	2014	平成24年度（2012年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2013	2015	平成25年度（2013年度）事業概要 芦ノ口道路第10次調査（TM10）	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2014	2016	平成26年度（2014年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2015	2017	平成27年度（2015年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室

*これらの刊行物は、東北大学機関リポジトリTOURおよび全国道路報告帳監で全て公開している。

東北大学機関リポジトリTOUR <http://ir.library.tohoku.ac.jp/re/>

全国道路報告帳監 <http://sitereports.nabonken.go.jp/ja>

東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2015

平成29年3月31日

発行 東北大学埋蔵文化財調査室
〒980-8577 仙台市青葉区片平2丁目1-1
TEL 022(217)4995

印刷 株式会社 東北ブリント
〒980-0822 仙台市青葉区立町24-24
TEL 022(263)1166
